

館報

庄内



庄内地区	
令和2年7月1日現在人口	
世帯数	7,019 戸
男	7,363 人
女	7,357 人
合計	14,720 人
発行 庄内地区公民館 (ゆめひろば庄内)	
電話 24-1811	
FAX 24-1812	

気づかされた
「当たり前前の生活」
のありがたさ!

未だ世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスは、私たちの「当たり前」と思われていたことに大きな影響を与えた。特に「行きたい場所はあるけど忙しくて行けない、会いたい人に中々会えない」とはあっても「会ってはいけない、移動してはいけない」ということはなかったのではないかと？ 人同士の交流や集いの場合は「自粛」を余儀なくされ、何気ない会話ですら距離を置いたり短い会話にしたりすることが「マナー」となりつつある。

今回の館報では、庄内地区の様々な世代から、このコロナ禍で感じた想いを綴って頂いた。改めて、私たちに与ったの当たり前前の素晴らしさを振り返ってみよう。

筑摩小学校児童の感想文

「日本のすごい所」

岡本 雄真

「コロナウイルス。おそらく日本の全ての人が「早くなくなりましょう」と思っているでしょう。僕もそうです。そのために多くの人が、色々な努力をしています。マスクや消毒などです。

僕は正直、「ここまで多くの人が一丸となって行動するとは思いませんでした。もちろん政府が言ったからというところもあると思いますが、今でもほとんどの人がマスクを付け、消毒をし、人との距離をとっています。

「今では普通」と思える位のことですが、それを「普通」と思えることが、僕はすごいと思います。

日本人は色々なことを習慣にするのが上手いと思います。これからもこの習慣を続けて、自分たちの力で自分たちをウイルスから守ることができればいいなと思います。

並柳小学校児童の感想文

「交流の大切さ」

中村 みゆ

私は、学校が休校してから人との交流を改めて大切だと思いました。

今年、並柳小学校の六年生は、人数が少なくなつたので、クラスがえをしました。クラスがえによって、五年生の時によく話していた友達も、だいたいクラスがかわってしまいました。初めて同じクラスになる人が多かったので、なかなか話ができないうちに、そのまま休校になってしまいました。休校中には、たくさんの人と一緒に遊びたいなあと思っていました。

今まで、こんなに学校に行きたいと思ったことはなく、学校に行けるのが、とても楽しみでした。学校に行けるようになってから、初めて同じクラスになった人とも、話してもり上がったたり、鬼ごっこをしたりして、学校っていいなと思いました。

開成中学校生徒の感想文

「不安と苛立ち、そして前へ」

岸川 夏央

最初はこんな状況になるなと思っていませんでした。休業が始まった頃は、部活動の仲間と一緒に自主練習ができていました。しかし、それもほとんどできなくなり、一人で練習するようになってからはモチベーションを保つのが特に大変でした。月日を追うことに部活動の最後の大会はどうなるのかという不安が高まり、ニュースなどで外出している人や一日の感染者数を見るたびに苛立ちも高まりました。

学校が再開されてからも、不安は収まらず、受験はどうなるんだろうといった気持ちも出てきました。しかし、大会の日程が決まってからは部活動などにも精を入れ、集中して一回一回を大切にしながらやっています。ですが、まだ授業への活力がない日があるのが課題です。でも一番嬉しいことはまた仲間と一緒に学校生活を送れていることです。

一日一日を大切に、一生に一度の中学三年生としての一年間を最高の思い出で色とりどりしたいと思います。

筑摩小「生活の記録」より

「久しぶりにクラス全員に会いました。前と変わっている人がいてびっくりしました。今年はある意味レアな年として一年間がんばりたいです」

「学年集会で先生の話聞いて気持ちをしつかりしないといけないなと思いました。五時間目の学級では『なおしたところ』について意見を言えて良かったです。久しぶりの給食はおいしかったです」

並柳小職員の違い

入学式を終え、さあこれから小学校のスタートだと思っていた三日目から突然の休校。また名前と顔が一致せず一人ひとりと話もできていない一年生と、何とか繋がりたいたと、宿題の最後にメッセージを書き続けました。保護者さんが様子を書いてくれたことも嬉しかったです。分散登校、そして六月から通常に戻りつつあり、「勉強が楽しい」、「給食がおいしい」、「アサガオさんが大きくなったね」と毎日一年生の笑顔がはじけています。改めて学校は子どもがいてこそ学校だと強く感じました。

サークル参加者

「コロナが教えた大切な事」

「ゆくりエアロビクス」参加者

地元のエアロビクスサークルに入り、10年以上が経ちました。当初、よく家の中でつまづいていたのがなくなったり、肩こりが酷く月に何回も整体に通っていたのが行かずに済むようになったり、もつれが当たり前になっていました。

それが、このコロナで三月サークル活動が休止で、長年なかった肩こり、更に頭痛腰痛まで起こる始末。外出自粛で整体にも行けず、益々体がおかしくなり、精神的にも

地域のお母さん

「息子と私の日常」

二歳男児の母

息子を感染させない、自分達も感染しない、こればかりを考えて生活していた。二歳になったばかりの息子はどこでも触る。その手を舐めてしまふこともある。だから遊具のある公園には連れていけないので、色々な所を散歩した。時々抱っこ抱っこ「星人」となってしまう息子と、のんびりと

たぐさんの春を見つげながら散歩はとても楽しかった。私が大変だったのは買い物

不安定になりました。今までたかが週に一回と、何気なく通っていたサークルでしたが、失ってみて、自分にとつてこの時間がいかに大切な物

だったか、本当に思い知らされました。ストレッチから軽い筋トレ、簡単な脳トレ、ダンスと、仲間と笑いながら汗をかき90分で自分の健康は維持できていた事を改めて自覚しました。コロナのお陰で気付けた仲間、運動、サークルの大切さ、ありがたさ。そして継続は力なりの意味。万全のコロナ対策をしながら、二度とサークルは休みたいです。

だった。主人が休みの週末に私一人で一週間分をまとめて買っていた。混み合う店内は感染リスクも高くなるのであるべく急ぎながらも、買い忘れないようにしなければならなかった。足りない物があっても、息子を連れて行くのは怖かったので週末まで我慢するしかなかった。

緊急事態宣言が解除されて、大好きな公園へ行つた。マスクを付けて、一緒に買い物にも行った。そしてごどもプラザにも遊びに行けるようになり、少しずつ息子と私の日常が戻ってきた。

集い場運営者

「『居寄庵』にエール！」

田島 伊織

さあ、いよいよオリンピッククイヤー!!と興奮気味の年初からわずか数日で、降ってわいた新型コロナ禍。あつという間の劇的变化に「ウイズコロナ」新しい生活様式と心ならずも定着しつつある感があります。

昨年二月のプレオープンを経て、ここ神田町会に「おしゃべりサロン 居寄庵」が発足するも、その一年後の今年三月から活動を自粛しました。高齢者が多い「集い場」としての役割はどう考えれば良いか？何をもちて不要不急か？

三密を避けて楽しめるのか？等々想いが錯綜し、不安は計り知れませんでした。そんな折、良かったことの一つに「積ん読」本から「でかした、ジーヴス」(ウッドハウス作)等、分厚い数冊が読め、静かな時間を過ごす事も出来ました。

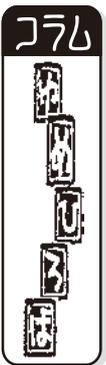
ただサロンの再開判断は自粛より難しく、迷いながらも六月、最大の注意の下、再開しました。今後は第二、三波も皆で助け合い繋がりを大切に続けてゆくつもりです。

終わりに...

小学生、中学生、サークル参加者、集い場の場運営者、そして子育て中のお母さんと、いろいろな方から今の思いを寄せて頂きました。

その中で皆が感じたことは、「今まで当たり前だった生活が、いかに素晴らしいことに気づかされた」ということではないでしょうか。その「当たり前前」の生活を作り上げてくれたのが、「人と人とのつながり」だということと同時に再認識することができました。

これから私たちは庄内地区で共に暮らす一人の住民として、その思いを大切にしながら新しい暮らしを創っていくことが求められます。私たちの将来のため、そして子どもたちの未来のためにも。



語彙力

情報発信方法の変化が著しい今、短い言葉で即座に反応することが求められているように思えて仕方がない。

新聞のコラムに、こんな記事が掲載されていた。ある小学校で休み時間につまづいて転倒した児童をからかう「うけるー」という声の原因で取っ組み合いのけんかが発展したとか。よく考えた言葉で表せたなら、解決できたろうにと、あきれってしまった。

このように、語彙力不足が招くトラブルが学校現場でよく見られるという。語彙力とは、言葉をどれくらい知っているか、そしてどれだけ使えるかという能力を意味する。冒頭に記述した短い言葉で即座に反応することに慣れてしまつと、言葉をじっくり考える習慣はつきにくく感じる。感情を自由にコントロールできる力とは、自在に使える言葉をたくさん持つことではないだろうか。

とはいっても、私自身も語彙力に未熟さを感じつつコラムを書いているが。(M)

コロナ禍の特殊詐欺に注意!

- ①銀行のカードは渡さない。
- ②暗証番号は教えない。
- ③在宅中でも電話は留守電にして折り返しに。